



元全日本王者・国際大会王者の雑古七段に、日本拳法に関してさまざまな質問に答えてもらった。
(文中敬称略)

「基本は奥義に通じる」

◆元祖「打・投・極」

—日本拳法の特徴は何でしょうか。
雑古 格闘技の主なものと言えば、ボクシング、レスリング、柔道、空手ですね。日本拳法を創られた宗家・澤山宗海先生も柔道の出身です。先生は関西大学で柔道をされていました。ただ、私が拳法をやり始めてすぐに亡くなったので直接お会いすることはできませんでした。昭和5年頃、関西にも唐手が入ってきて、「これはすごいものができた」と感じられたそうです。それで御自身も中心となり空手部を作られました。その際、出身が柔道だったので、「なぜ空手には投げや関節技という組み打ちがなく、逆に柔道には突きや蹴りがないのか。これを一つにすれば、理想の格闘技

ができるだろう」と考えられたということ。今は空手と柔道を合わせたようないろいろな格闘技がありますが、当時は空手と柔道を合わせたような格闘技はなかったからです。

宗家、澤山宗海先生の残された著書「日本拳法」によりますと、「わが国の昔に、素手の格技を求めようとするならば、どうしても、相撲の歩いてきた道をさかのぼらねばならない。一番古い故事といえは、古事記の神話で、高天ヶ原が出雲へ、国ゆずりを申し込んだくんだりにおける建御雷神と建御名方神の力比べであろう。建御雷神は建御名方神の腕をとらえて「若輩をとるがごとく、つかみひしいで投げはなつ」とあるから、今で言えば、逆手の投げであったかもしれない。つぎに有名なのは、人皇十

一代垂任天王の七年七月七日に、大和の磯城群の禁庭において、初の展覧試合としておこなわれた野見宿禰と当麻蹴早との勝負である。その模様は、宿禰が蹴早のみぞおちを蹴って倒し、さらにその肋骨を踏み蹴って殺したと伝えられている」とあります。このような拳足の技と組み打ちの技を合わせた格闘技はありませんでした。だから日本拳法ができるまでは、武器を使わない武道と言えば相撲、柔道と空手であったし、西洋では、ボクシングとレスリングのように、打撃の技と組み打ちの技に分かれていました。そこで澤山先生は、「柔道と空手を何とか一つにできないものか」と考え、防具を考案されました。日本拳法の面は頑丈ですが、あれを自分たちの手で作ったのです。面を着装して組手をするにによりケガが激減しました。投げ技・関節技と突き、蹴り一つにした総合武道、というのが日本拳法の大きな特徴です。つまり、元祖総合格闘技なわけです。

投げ技を伴った一本の説明をしますと、柔道では投げると一本になりますが、日本拳法では投げただけでは一本になりません。投げてその後、突きや蹴り、関節技でとどめをさして一本となります。ですから本当に実戦的な武道だと思います。

◆防具について

—澤山先生が最初に考案された防具は、今の物と変わりますか。
雑古 私も一度拝見しましたが、現在使用されているものから比べると安全性には少し欠けますが、当時としては素晴らしい出来であったと思います。

—関西と関東では防具に違いがありますか。
雑古 現在は交流がありますが、長い間、

関西と関東では別々に活動してきました。その結果、防具も関西と関東では若干違っています。関西の物は耳の部分に皮が張ってあります。西日本の防具改良委員会が、いろいろ改良を重ねて今の形になったわけです。関東は関東で改良を重ね、お互いに違う形になってしまいました。でも今後は融合されていくと思います。

—防具以外に関西と関東の違いはありますか。
雑古 関東では素突という縦拳の突きが多いのに対して、関西では拳を捻って突いたり、横から打ったりする打ち方も多用します。ですから防具も関西の物は横からの攻撃に対しても強いという特徴があります。

◆組織について

—日本拳法の組織は現在どのような形になっているのでしょうか。
雑古 今は東日本に日本拳法協会があり、西日本には日本拳法会がありますが、一緒にしようということで、全国連盟ができています。

◆縦拳と横拳

—先程の突きに関してですが、日本拳法では縦拳を用いるというイメージが強いのですが、関西では縦拳が主というわけでは無いのでしょうか。
雑古 突きには素突（縦拳）、捻突、波動突とありますが、捻って突く方が、衝撃力が高いと考えられています。ただ実際の程度衝撃力に差があるか測定するには、それ専用の機械が必要となり、莫大なお金がかかりますので今のところできません。しかし、将来的にはそのような実験ができればと思っています。